

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	久保田 斉也
論文題目	ギュスターヴ・フローベール『感情教育』論——実定的な視線のもとで
<p>審査要旨</p> <p>フランス 19 世紀中葉の作家ギュスターヴ・フローベールは、何よりも小説言語の彫琢にこだわった小説家である。三つの大きな小説を書いたが、久保田氏が論文の主たる対象としたのは、その三作目『感情教育』である。一八四八年の二月革命を背景にしたこの小説は、政治的・社会的・思想的・風俗的視点から描き出されていて、一種の時代の「精神史」でもある。</p> <p>本論文は、『感情教育』がどのように時代の「精神史」たりえているか、小説の底流に何が流れているのかに、光を当てたものになっている。</p> <p>まず、『感情教育』というタイトルにふくまれる「感情(的)」(原語は形容詞 sentimental)がフランス語において、それまでどのような意味で用いられてきたかを検討したあと、フローベールが用いる「感情的」という言葉が、「不活発な情熱」というニュアンスを帯び、「センチメンタリズム」という側面に重点を置いていることを指摘し、この「感情的」という言葉にイロニーと否定性が託されていることに着目した。「教育」という言葉については、時の経過を経て社会的に豊かな実りを獲得することがないという意味で、裏返された「教育」ともいえる否定的な側面を帯びることに注目し、『感情教育』というタイトルが二重にイロニーと否定性を帯びたものであることを示した。</p> <p>そこで次に、フローベールの主題である「もの悲しいグロテスク」が『感情教育』においてどのように形成されているかを検討する。まず、「グロテスク」という言葉の歴史的変遷を確認し、次いでフランス文学において、とりわけ「グロテスク」に焦点をあてた詩人・小説家・劇作家ユゴーが用いる「グロテスク」概念を検討し、それらを参考軸にしなが、フローベールの場合、「人生の本質にかかわる絶対的滑稽さ」としての「もの悲しいグロテスク」があると分析・指摘し、それが異質なものの複数的共存という形式や特質を帯びて現れることを明らかにした。</p> <p>さらに、この「もの悲しいグロテスク」の世界に関係するイロニーについて考察を加える。フローベールのイロニーを見る際、欠かすことのできない『紋切型辞典』にふれ、フローベールのイロニーは通常のものとは異なり、「引用」と「倒錯性」にその特徴があることに着目する。これを参考に、『感情教育』を分析し、フローベールのイロニーにおいて、発話の起源がひとりの主体に特定できず、発話の起源に語り手と匿名の他者が二重写しになっていることを示した。そこに、フランスの言語学者であるオズワルド・デュクロのイロニー理解、つまり「イロニーとは、語り手が他の誰かの視点を、その他者性の明示的な徴をはずしながら発話すること」という見解を重ねて説得的に示した。この指摘は、本論文の一つの成果である。このイロニーの特徴が、フローベールにおける三つの小説美学である「結論をくだすことの拒否」、「没我性」、「視点の相対性」に深く結びついている点にまで、考察を広げている。</p> <p>本論文は、こうして「同時代の精神史」に深くかかわる制度とその言説の検討に移る。とりわけ、そのフィクション性に着目する。フローベールが見ている制度とは、その究極的な正当性を保証する根拠を持たない点において虚構的であり、また、革命のさなかの言説のインフレーションのもと、言説の平板化や紋切型化が起こることにこの作家が注目し、「紋切型」の言説、イメージの言説が蔓延するという事態がテキスト内にも生成されている点を具体的に指摘している。そうしてその対極にあるものとして、この小説家がいかに言葉のゆるぎなさに拘ったかが説得的に言及された。これまでフローベールの言語へのこだわりを論じた論文はあるが、これを、本論文</p>	

は新たな視点、つまり制度や言説の虚構性の対極において意味を持つと構想したところが評価に値する。

そうした考察を受け、次に本論文は、『感情教育』の小説言語がどのような様態として現われるのかを具体的に検討する。そしてその特質が、始まりの唐突さ、因果関係の不在、別個の出来事の並記といった点にあると分析し、それらを「非連続の連続」という視点から考察し、さらには、そのことが空白と消失の主題をもたらすと論じている。

これらを踏まえて、「非連続の連続」と「消失の主題」から浮かび上がってくる空白・空虚が、この小説においてどのようにかかわっているのかを、ジャン・ルーセの論文とフローベールの「ほら話（冗談）」にまつわる手紙から本論文は検討する。そうしてフローベールは、空虚な空間に実在と密度を付与することで、空虚と十全性が表裏一体であり得るような『感情教育』の特徴を見事に指摘した。そこには、「人生の本質」に関わりながらも、「関心」や「執着」といった個別的なこだわりから解放された視線、つまり実定的な（この語については、「肯定的な」でもいいのではという意見が副査より出された）視線が注がれることになり、そのことで、「失敗」したものとして語られることが多い登場人物の「生」もまた肯定されることになる、と指摘された。『感情教育』とは、様々な否定性を経ながら、実定性（この語についても「肯定性」でいいのではないかの意見が副査より出された）のもとで、ニヒリズムに抗する肯定を切り開くものとしてあることを結論として提示している。付言すれば、空虚と十全性の表裏一体性にしても、否定性と実定性（肯定性）の両立にしても、「もの悲しいグロテスク」において久保田氏が分析・指摘している異質なものの複数的共存という形式と言えるのではないか、という指摘が審査委員から出された。

以上の諸点から、審査委員全員一致して、本論文が博士学位の授与にふさわしい論文との認識を共有した。

公開審査会開催日	2016 年 12 月 17 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	芳川 泰久	19 世紀フランス文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	川瀬 武夫	19 世紀フランス文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院 非常勤講師	大須賀 沙織	19 世紀フランス文学	Ph.D.(パリ第四大学)
審査委員				
審査委員				